

## その後の人たち 老人介護のフォークロア

The People who Need Care:  
The Folklore in Old-age Attendance

### 渋谷 研

はじめに

①老人というカテゴリー

②「弱者」として老人

③介護の「社会化」

④自律した「家族」

⑤公的関与と私的領域

⑥介護状況における第三者としての援助スタッフ

⑦対等な関係としての介護

おわりに

#### 【論文要旨】

急速な高齢化社会を迎えつつある今日、老人問題に対する民俗学側からの議論も様々に行なわれるようになってきている。が、そもそも民俗学にとって老人とはどのような存在であったのか問い直してみると老人あつての民俗学という状況は否定できない。しかし、その意味するところは語りべ、伝承者としてのみ存在意義があつたということでもある。それ故、語らなく（語れなく）なつた老人は、もはや話者としての価値もなく民俗学者の目から消えていくだけの存在となつていく。民俗学にとっての老人はこうした存在であると指摘されてもしかたのない状況が確かにあつた。なぜなら従来民俗学が対象としてきた老人は、語りべ、伝承者たる「元気な老人」たちだつたからである。他方、寝たきりなど介護を必要とする老人たちは、民俗学者の眼から遠ざかり、老人自身も社会的な疎外感と人生に対する諦観にさいなまれていく。このような老人たちはただ死を待つだけの存在なのだろうか。

現実にはこうした老人たちと直に接し、老人たちの外面、内面の世界に深く関わりをもつ人たちがいる。ヘルパー、保健婦、看護婦、民生委員などである。彼らは介護老人だけでなくそれを支える家族（生活）にも関わり、介護老人を中心としたひとつの人間社会を形成していく。

こうした姿を民俗学がどのように汲み取ることができるのか、本稿はその模索の第一歩である。そこで手続きとして、まず、自明とされている老人とはいかなる定義に基づいているのかその検討からはじめていく。次にこの定義によって何が展開されているのか明らかにし、その上で介護の実践報告を通してそこに見いだせるものは何なのか考察していく。

キーワード：老人、介護、家族、公的-私的、民俗学